



2013. 09. 01 合唱団SATOKO結団式に際して

今年の参加者は大人55人、子供17人です。本番当日は参加できないけど練習には参加したい、という人も含めていますので、ステージに立つのは70人前後となる予定です。

第13回となるメモリアルコンサートを「今回が最後」と宣言して取り組んでいます。昨年、第12回が終わったあと、最古参のメンバーから、もうこれで区切りをつけたほうがいいのではないか、という意見が出され、同調する意見が実行委員会の大勢を占めるようになりました。

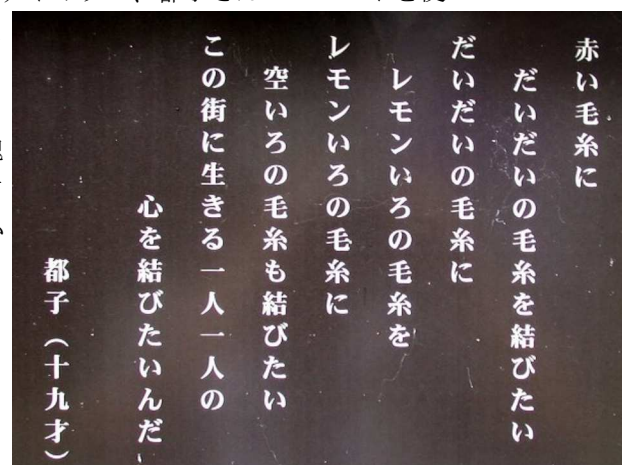
もう限界ではないか、という気持ちには何度も陥りましたが、それでも、毎回の「感想文」のはげましに後押しされて、なんとか続けてきました。

しかし、慰霊碑の移転、ご遺族の高齢化や健康状態、実行委員自身の高齢化など、条件もそろってきました。

そんなこんなで、区切りをつけるけれども、いつのまにか終わってたという形ではなく、これが最後と明示して取り組もう、ということになりました。「次の一手」に思いをめぐらす動機づけになるのではないかと期待もありました。なぜやめるのか、といろんな場で問われることは、覚悟の上とはいえ、たいへん辛いことです。

思えば、オウムの残忍な事件への怒りに突き動かされて、地域雑誌で取り上げ、都子さんのご両親とのつながりができました。やがて、コンサートを開きませんか、という思いがけない提案がもたらされ、わけもわからず取り組みました。当日、坂本堤さんのヴァイオリン、都子さんのフルートを使って演奏されるまで、なぜ二人と音楽が結びつくのかわかりませんでした。

第1回のコンサートの前日、僧ヶ岳林道わきの慰霊碑で鎮魂の演奏が行われました。そのとき、はげしい雷雨が一転して青空になり、虹がかかりました。僧ヶ岳の山懐で、尾根にかかる二重の虹が間近に見守る中での演奏でした。



慰霊碑の裏面に刻まれた「赤い毛糸に…」の詩を読んだときの衝撃は、忘れることができません。

僧ヶ岳の虹と、慰霊碑の詩と、同時に出会わなければ、これほどに強烈に心に突き刺さって来なかったでしょう。偶然とはいえ、運命のようなものを感じます。

こんな詩を書いた都子さんとはどんな人だったのか、なぜこの詩を書いたのか、そんな疑問をご両親に向けました。そして、都子さんと堤さんが、ともに音楽好きではあったけれども、それが二人を結び付けたのではなく、ボランティア活動に熱心に取り組む中での出会いだったことを知りました。虹色の毛糸に託して人と人の心の絆を願った詩が、大夕張でのサマーキャンプから生まれたことも知りました。

私自身の学生時代は、東京の下町や僻地の無医地区でのフィールド活動に明け暮れていました。妻との出会いも、フィールド活動の場でした。とうぜんながら、都子さんや堤さんの生き方に強い共感を抱きました。お会いしたこともない人に友人のような、同志のような不思議な親近感を抱き、それが、その後のメモリアルコンサートに取り組むエネルギーの源になりました。いま、一区切りをつけるにあたって、友との別れのような、辛い辛い気持ちです。

「あなたの心に」を歌い継いでいく、凶悪なカルト集団が成立した社会を省みる、都子さんたちの生きた証を語り伝えていく、そんな活動を、形を変えても続けていきたいと思っています。まだ、具体的な形にはなっていません。いろんな提案や助言をいただければ幸いです。

小熊清史

